

# 増賀聖人の奇言奇行に隠された宗教思想的理由

— 『今昔物語集』 卷第十九第十八の考察 —

児玉 正幸\*

## The Religious Reason for the Eccentricities of Zohga, the Holy Buddhist

— A Study of One Tale concerning Zohga (vol.19, § 18) in *The Konjaku Tales* —

Masayuki KODAMA\*

### Abstract

Zohga was a very famous and holy Buddhist in the Heian period. In his youth, he studied a lot at the Hieizan mountains near Kyoto in order to become a holy Buddhist.

However he became disappointed with the corruption of the Tendai sect of Buddhism. He accused the Tendai sect of having much to do with the aristocracy and of being involved in corruption. Getting angry with those corrupt Buddhists and their patrons, he moved from the Hieizan mountains to another mountain far from the old capital of Japan.

According to *The Konjaku Tales*, one day a messenger came and asked Zohga to help his mistress to become a priestess. Though Zohga's disciples were worried about his eruption of anger, he willingly accepted the offer. However, at the Court he behaved very eccentrically. In this paper I intend to clarify why Zohga, who was renowned as a holy Buddhist, did such insane things.

**KEY WORDS:** The Konjaku Tales, religion

### はじめに

増賀聖人(917~1003)は、天台中興の祖慈恵大師、即ち良源(912~985)門下の高僧である。しかしながら、のちに比叡山の第18代天台座主(966)を経て、宗教権力の頂点たる大僧正(981)にまで上り詰めた師僧の良源<sup>1)</sup>からすれば、増賀は実に風変わりな不肖の高弟であったに違いない。それと言うのも、門弟数千人と謳われた良源が平安貴族社会の護持僧に甘んじたのとは対照的に、増賀は苛烈なまでに反俗的精神を貫いた、と伝承されているからである。この反骨精神旺盛な異色の法

師は、延長4(926)年、10才で比叡山に登り、在山37年間の厳しい修行の間、お膝下の平安貴族仏教(天台宗)とその後援者の平安貴族を弾劾し続けて、最終的には人里離れた多武の峰(大和国磯城郡)を終の住処にした、と語り伝えられている。

増賀聖人の貴族嫌いと貴族仏教批判は、生はんかではなかった。増賀に言わせれば、天台宗は庶民の心の救済を忘れて、貴族専属の御用宗教になっている。俗界を離れた霊峰の比叡山で厳しい修行を積んだ法師たちも、今や昔日の面影は見えない。彼らも比叡山入りした頃は道心堅固で、世俗の栄達をきっぱり捨て去る覚悟に燃えた清新の

\*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

身であったろうに、今やきれいさっぱり初心を忘失、美貌と美声の法師を好んで護持する王朝貴族に阿附して、官位と金品の塵埃にまみれた俗権のしもべに墮落している。

以上が、諸書<sup>2)</sup>に見える増賀の既成平安仏教批判のスタンスであった。

増賀の仮借ない過激な批判的精神は、恵心僧都(源信僧都)(942~1017)に継承され、後世、庶民の心の救済を目指す鎌倉新仏教(浄土宗・浄土真宗・日蓮宗・臨済宗・曹洞宗)の呼び水となった。法然(1133~1212)や親鸞(1173~1262)はもとより、日蓮(1222~1282)も栄西(1141~1215)、道元(1200~1253)もみなこぞって、春秋に富む年頃には比叡山で学徳を積んだ俊秀であった。その意味で、相次いで古い革袋(天台宗)に新しい般若湯を注ぐことになった鎌倉新仏教の開山たちは、出藍の誉れ、と言える。

そうした一群の宗教改革者たちに先駆けた、苛烈な仏道修行僧の増賀は、平安律令時代の全盛期に生まれ合わせた反時代的な鬼子故に、古今無類の高僧、と官民から畏敬されながらも同時に、気心の知れぬ極め付きの変わり者、とのレッテルも張られていたようである。

ところで、名聞利養を超越し、世俗の権力を歯牙にかけない聖僧、増賀ともあろう人物がある日、弟子たちの予想を裏切って、世俗の権力者の出家のお手伝いを引き受けた果てに、宮中で破廉恥極まるご乱行に及んだ、と言う。増賀の余りの乱心ぶりに居並ぶお歴々があつけにとられ、簾の内近くお仕えしている女房たちは「目口ハダカリ」、簾の外に控えている高僧や貴族は「齒ヨリ汗出」づる有り様だった、と言うのである。

その詳細な経緯は、以下に引用の説話「三條大皇太后宮出家語」(『今昔物語集』巻第十九第十八)の中に、確認することができる。当該説話が真実の一斑を伝えているとすれば、当時の社会常識というよりもむしろ、正常なホモサピエンス通有のモラルを大幅に踏み外した増賀の奇言奇行は、一体どうしたことか。

本稿では、当該説話の所伝する天下の名僧、増賀聖人の奇言奇行に隠された宗教思想的理由を究

明する(一)。

### 一、増賀聖人の奇言奇行に隠された宗教思想的理由

今昔、三條大皇太后宮ト申スハ、三條ノ關白  
ダイジャウダイジン マウシ 大政大臣ト申ケル人ノ御娘也。円融院ノ天皇ノ御  
タカ 代ニ后ニ立セ給テ、微妙ク時メキテ御マシケル間ニ、自  
ツク 然ク年月ヲ積テ、老ニ望ミ給ヒメレバ、出家セムト思シテ、  
コトサラ 故ニ、多武ノ峯ニ籠リ居ル増賀聖人ヲ以テ、御髪ヲ  
ハサマンメ 令狹ムト被仰テ、態ト召ニ遣シケレバ、御使多武ノ峯ニ  
フサメシ 行キテ、此ノ仰セテ告グルニ、聖人、「奈貴キ事也。増  
ホカノ 賀コソハニ成シ奉ラメ、他人ノ誰ヲ成シ奉ラムト」  
デ 云ヘバ、弟子共此レヲ聞テ、「此ノ御使ヲバ嘆  
オモヒ 打テムスト思フルニ、不思ザルニ外ニ、此ク和カニ参ラムト  
ケ 有ル、希有ノ事也」ト云ヒケル。

カクテ、三條ノ宮ニ参テ、参レル由ヲ令申ム。宮  
マホリ 喜バセ給ヒテ、「今日吉日也」トテ御出家有リ。上達部  
シカルベ 少ク、可然キ僧ナド多参リ合ケリ。内ヨリモ御使有リ。  
オホク 此ノ聖人ヲ見レバ、目ハ怖シ氣ニテ、貴ト乍煩ハシ  
オノロ 氣ニ有ケル。□□コソハ人ニハ怖レラレケレト見ル人々  
イデ 思ヒケリ。御前ニ召シ出ラレテ、御几帳ノ許近ク参テ、  
ミダシ 出家ノ作法シテ、□□長キ御髪ヲ搔出デ、此ノ聖  
メ 人ヲ以テ令挾メ給フ間、簾ノ内ノ女房□□泣事糸  
オホ □□シ。挾リ畢奉テ、聖人居去カムト為ル時ニ、聖  
コソ 人音ヲ高クシテ云ク、「増賀ヨシテ召テカク令挾メ給フハ  
イカ 何ナル事ゾ。更ニ不心得侍ズ。若シ乱リ穢キ物ノ  
オホキ 大ナル事ヲ聞シ食タルニヤ。現ニ人ヨリモ大キ侍レドモ、  
ネリギス 今ハ練絹ノ様ニ乱々ト罷成ニタル物ヲ。若上ハケシウ  
イ ハ侍ラザリ物ヲ。糸口惜」ト云フ音、極高シ。簾ノ  
ニヨウバウタチ 内近ク候フ女房達、奇異ニ目口ハダカリテ思ユル事  
カギリナシ 無限シ。宮ノ御心ニハタラセテ、貴サモ皆失セテ希有・  
オホキ 奇特ニ思食ス。簾ノ外ニ被候ハ、僧俗ハ齒ヨリ汗  
アラ 出デ、我レニモ非ズ心地共シテ居タルナラベシ。

聖人罷出ナムト大夫ノ前ニ袖打合テ居テ云ク、  
マカリイデ 「年罷リ老シテ、風重クテ、今ハ只痢病ヲマツレバ、  
ワザ 参ルニ不能シ候ヒツレドモ、ト思シ食ス様有テ召シ  
カマヘ 候ヘバ、相構テ参リ候ヒツルト、難堪ク候ヘバ、念ギ罷  
イデ 出候フ也」トテ出ツルニ、西ノ對ノ南ノ放出ノ簀子  
イデ 築居テ、尻ヲ搔上テ椽ノ水ヲ出スガ如ク臆リ散ス。  
キワメ 其ノ音極テ穢シ、御前マデ聞ユ。若キ殿上人・侍

此<sup>レ</sup>見<sup>ワラ</sup>咲<sup>ヒ</sup> 嚙<sup>ル</sup> 事<sup>ト</sup> 无<sup>カ</sup>限<sup>シ</sup>。聖人<sup>イデ</sup>出<sup>スレバ</sup>、長<sup>オトナ</sup>僧<sup>ナル</sup>俗<sup>ハ</sup>、カ、ル物<sup>ヲ</sup>狂<sup>マシ</sup>召<sup>ス</sup>タル事<sup>ヲ</sup>極<sup>キ</sup>テ誇<sup>リ</sup>、申<sup>ケレドモ</sup>、  
甲斐<sup>カヒ</sup>无<sup>ク</sup>テ止<sup>ミ</sup>ニケリ。宮<sup>ノ</sup>ハ出家<sup>ノ</sup>後<sup>ニ</sup>、勤<sup>ニ</sup>行<sup>テ</sup>御<sup>ケル</sup>。

----- (中略)

而<sup>シカ</sup>爾<sup>ル</sup>間<sup>ニ</sup>、比<sup>ヒ</sup>叡<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>横<sup>ノ</sup>川<sup>ノ</sup>恵<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>僧<sup>ノ</sup>都<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>人<sup>ヲ</sup>、  
道<sup>ノ</sup>心<sup>盛</sup>ニシテ、京<sup>中</sup>ニ行<sup>キ</sup>テ乞<sup>ヒ</sup>食<sup>シ</sup>ケルニ、京<sup>中</sup>ノ上<sup>中</sup>  
下<sup>ノ</sup>道<sup>俗</sup>・男<sup>女</sup>首<sup>傾</sup>ケテ、擧<sup>テ</sup>、其<sup>ノ</sup>時<sup>ノ</sup>僧<sup>侶</sup>ヲ  
儲<sup>テ</sup>、僧<sup>都</sup>ニ奉<sup>ケル</sup>ニ、此<sup>ノ</sup>宮<sup>ニ</sup>銀<sup>ノ</sup>器<sup>共</sup>ヲ故<sup>ニ</sup>  
打<sup>セテ</sup>、其<sup>ノ</sup>僧<sup>都</sup>ノ時<sup>僧</sup>供<sup>ヲ</sup>奉<sup>リ</sup>給<sup>ケレバ</sup>、僧<sup>都</sup>此<sup>レ</sup>  
見<sup>、</sup>「餘<sup>リ</sup>ニ見<sup>苦</sup>」ト云<sup>ヒ</sup>テ、其<sup>ノ</sup>乞<sup>ヒ</sup>食<sup>ヲ</sup>止<sup>ム</sup>メテケリ。  
此<sup>ノ</sup>宮<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>様<sup>ニ</sup>信<sup>ニ</sup>御<sup>ケル</sup>ニ、此<sup>レ</sup>少<sup>シ</sup>餘<sup>リ</sup>事<sup>ニ</sup>  
无<sup>心</sup>ナル事<sup>ニ</sup>テ有<sup>ケル</sup>。

此<sup>ノ</sup>宮<sup>ハ</sup>時<sup>關</sup>白<sup>ノ</sup>御<sup>娘</sup>、円<sup>融</sup>院<sup>ノ</sup>天<sup>皇</sup>ノ御<sup>時</sup>ニ  
后<sup>ニ</sup>立<sup>テ</sup>微妙<sup>ナリ</sup>ケルニ、皇<sup>子</sup>ヲモ女<sup>宮</sup>ヲモ否<sup>産</sup>奉<sup>リ</sup>  
不<sup>給</sup>ハザリケレバ、世<sup>ニ</sup>口<sup>惜</sup>キ事<sup>ニ</sup>ナム、父<sup>ノ</sup>關<sup>白</sup>殿<sup>モ</sup>親<sup>キ</sup>  
人<sup>ヲ</sup>モ思<sup>ヒ</sup>タリケル。

然<sup>テ</sup>年<sup>老</sup>弥<sup>ヨ</sup>心<sup>ヲ</sup>菝<sup>シ</sup>此<sup>ノ</sup>出<sup>家</sup>シテ勤<sup>ニ</sup>行<sup>ヒ</sup>  
給<sup>ヒ</sup>ケルトナム語<sup>リ</sup>傳<sup>ヘ</sup>タルトヤ。

〔三條大皇太后宮出家語〕、日本古典文学大系25『今昔物語集 四』〔卷第十九第十八〕、岩波書店、1984年〕。

(1)

当該説話の前半部を一読すれば了解できるように、増賀は宮中に参上した折に、金枝玉葉の徒の鬘鬘を買う非常識このうえない所行に及んだ、と言う。高貴なご婦人相手にみだらな言葉を投げつけたり、宮中のやんごとない殿上人の前で傍若無人な排泄行為に及んだ、と『今昔物語集』は伝えているのである。場所柄を弁えぬ犬猫ではあるまいし、ましてや高僧としての名声天下に轟く増賀ともあろう人物の、著しく常軌を逸脱した無作法を伝える当該説話は、果たして、客観的史実なのであろうか。

それを調べる手がかりとして、幸いなことに、私たちの手元には平安貴族の多くの日記が現存している。当該説話に登場する増賀と三条関白太政大臣藤原頼忠（928～989）の長女の遵子<sup>3)</sup>（957～1017）は、実は、藤原道長（966～1027）・頼道（990～1074）父子と同時代の実在の人物である。

飛ぶ鳥を落とす勢いの道長は、時の宮廷権力の頂点に上り詰めた切れ者で、満々たる矜持を込めて「望月の歌」<sup>4)</sup>を詠み上げてはばからぬほど自我共に許す最高権力者であった。その道長全盛期の王朝貴族の生態を今日に伝える日記の一つに、藤原実資の書き残した『小右記』<sup>5)</sup>がある。彼の日記（長徳三年三月廿日の条）に依拠すれば、「三条関白太政大臣（藤原頼忠）の娘（遵子）」の剃髪は長徳三年（997）三月十九日で、同座を許された僧侶は「大僧都覚慶、大僧都観修、阿闍梨覚慶祚、阿闍梨証空等」に他ならない。

『小右記』が事実を正確に記録しているとすれば、増賀は肝心の座には侍らなかつたということになる<sup>6)</sup>。事件の特異な性質や日記の私的記録性、藤原実資が遵子といとこである点を考慮に入れると、事件の真偽は俄かには決着を定め難い。

(2)

しかしながら、本稿では、『今昔物語集』が上記の増賀譚を記録に組み込まざるを得なかつたという、当該説話文学の作者の主観的インパクトを尊重しておきたい。それと言うのも、当該説話の真偽がどうあれ、少なくとも、のちの世の院政時代の『今昔物語集』の作者が増賀に対して、そのような常識破りを真顔でしかず人物、との主観的印象を抱いていたことだけは、否定できない真実であるからである。この厳然たる事実こそ、当該説話の枝葉の粉飾を取り除いたあとに残る原核であり、当該説話の作者の個人的増賀観に他ならない。そうした視点から、以下、事件の真偽をひとまず括弧に入れておいて、増賀の奇矯な言動に隠された宗教思想的理由を明らかにする。

貴族嫌いで著名な増賀ともあろう人物が王朝貴族の使いを丁重に迎え、二つ返事で参賀を言上したとされる背景には、一体いかなる事情が伏在したのであろうか。

（第1説）日頃の増賀の言動を見聞する弟子筋の予想を大幅に裏切る増賀の対応は、超俗を売り物にする口先だけの売名えせ坊主の正体を露見させただけなのであろうか。

（第2説）それとも、人跡希な山中で厳しい修行

に明け暮れる増賀の精神状態に異常がきたしたのか。

(第3説)はたまた、二つ返事の参賀は、増賀自身の正常な判断に基づく作戦行動だったのか。

増賀の気がふれたとすれば、名僧としてあまねく知られたこの人物の急激な身の上の変転に、『今昔物語集』の作者はもとより、伝存する各種の書籍(注1参照)が当然、筆を割くことであろう。ところが、その手の記述(第2説)がどこにも見つからないのである。それどころか、実は同原拠と推定される同話を掲載する『宇治拾遺物語』は、末尾を次のように締めくくっているのである<sup>7)</sup>。

かやうに、事にふれて、物ぐるひにわざと振舞ひけれど、それにつけても、貴きおぼえはいよいよ増りけり」(「増賀上人三條宮に参り振舞事」卷一ノ七)

これほどの気違い沙汰があれば、並大抵の高僧の宗教生命は閉じてしまうはずなのに、超破廉恥な振る舞いがかえって増賀の人気を高めた、と上掲説話は伝える。増賀の狂態に対する庶民の支持、拍手喝采があった、と『宇治拾遺物語』が伝える点から判断するに、増賀は狂気に陥ったのではあるまい。

また、名聞利養を放下したと見せかけて、その実、名利への執着心を人一倍強烈に抱く生臭坊主の本性が露見しただけの話(第1説)でもあるまい。

そうではなくて、以下に述べる理由で、増賀が意図的に狂態を演じているものと解釈せざるを得ない(第3説)。結論を先取りすれば、彼は用意周到に計画的乱行に及んだものと思われる。

では、彼はなぜ、物狂いを演じるのか。

増賀が学んだ天台宗の根本教典に『魔訶止観』がある。本書は天台智顛の説く仏道修行の原理と方法を門徒の灌頂が記録した座禅の指南書である。実は、天台宗三大書(『魔訶止観』・『法華玄義』・『法華文句』)の一つに数えられる本書に、増賀の奇言奇行を理解する一つの鍵が隠されている。

もし、名利の眷属、外より来たり破らば、この三術を憶い、齒を齧<sup>くいしば</sup>つても忍耐せよ。千万請ずといえども、確乎として抜け難かれ。譲れ、隠せ、去れ<sup>8)</sup>。

と、門弟に檄を飛ばす天台智顛の厳格な言葉は、純粹に道を求める修行僧の精神を激越に刺激する響きを十分に持ったであろうことは、想像に難くない。当時、栄達と金品にまみれた比叡山のありふれた腐敗僧の実態に吐き気を催しながらも同時に、我が身に巣くう同じ賊徒の内在をまだ直視できるだけの初々しさと、位階に執着しない意志の強韌さを持ち続けることのできた修行僧であれば、誰しも華やかな京の都を見おろす比叡山をさっさと降りて、人里離れた幽邃の地で心静かに修行を続けようとしたことであろう。同書には、また、

もし跡<sup>かく</sup>を遁<sup>のが</sup>すも脱れずんば、まさに一挙万里し、絶域他方にしてあい暗練することなく、快く道を学ぶことを得ること、求那跋摩のごとくすべし<sup>9)</sup>。

と、ある。増賀が天台智顛のそうした教えに過剰に反応する琴瑟相和す一人であったとすれば、「一挙万里し、絶域他方にして」、当時としては深山幽谷の地の多武の峰に籠居したであろうことも、十分に想像可能である。

以上の推理が正しいとすれば、比叡山から多武の峰に仏道修行の河岸を変えた増賀に対して、比叡山の僧侶を退廃させる元凶たる王朝貴族からお召しがかかれば、何が起こるか、おおよそ察しがつくというものである。同書には、禪修行の一環として、「佯狂」も説かれているのである。

当時比叡山で、天台宗門徒が愛読した『魔訶止観』の教えに依れば、我が身がしぶとい名聞利養の賊徒に追われた場合には、「まさに徳を縮め<sup>きず</sup>瑕を露わし、狂を揚げ実を隠し」<sup>10)</sup>、とある。つまり、名利から逃れるためには、手段としての「偽装狂気」も止むなし、との指南である。

彼は愛読する仏典『魔訶止観』の教えに忠実に、我が心に巣くう断ち難い名聞利養の賊徒との共生

関係から逃れるために、唾棄すべき貴族相手にわざと物狂いを演じる挙に及んだのであるまいか。

従って、宮様から「断髪導師に」とのたつての所望が自分に届いた時点で、増賀の胸には既に、その後のシナリオが作成されていたものと思われる。増賀を畏敬する門徒たちにも、増賀のその腹の内までは読めなかったのであろう。

ちなみに、増賀には勿論、くだんの宮様個人には何の私的怨恨もなかったはずである。増賀の憤怒の対象は俗権の象徴たる平安王朝貴族であった。彼らは平生、何の屈託もなく名聞利養に狂奔する世俗の欲得の池にどっぷり首まで浸かり、競争相手を敗者の流す血の池に沈め合いながらも、その実、澄まし顔で上品を装う。娑婆のわが身の安泰と死後のわが身の救済のみをこいねがう特権階級貴族に対する満身の怒りが、『魔訶止観』の教え（「名聞利養の放下」）に忠実に多武の峰に隠れて生きる増賀をして、世間の常識を大きく逸脱させたものと考えられる。俗界の特権階級に対する反俗的な怒りを引き金とする増賀聖人の、『魔訶止観』の教えに忠実な事理一如、行道一如こそが、この反骨の人の奇言奇行に隠された背後の宗教思想的理由に他ならない。

## 註

- 1) 奈良時代の行基以来空席であった最高位の大僧正に、綺羅星の群僧を尻目に平安仏教史上初めて上り詰めたのは、良源であった。彼の順風満帆の昇進とその背後の宗教的政治的動向については、平林盛得著『良源』吉川弘文館、昭和51年、参照。
- 2) 『本朝法華験記』（日本思想大系7）  
『今昔物語集』（日本古典文学大系25）  
『宇治拾遺物語』（日本古典文学大系27）  
『元亨釈書』（国史大系31）  
『増賀上人行業記』（続群書類従八輯下）  
『叡岳要記』（群書類従釈家）  
『初例抄』（群書類従釈家）  
『僧官補任』（群書類従補任）  
『僧綱補任抄出』上（大日本仏教全書伝記叢書）

『続本朝往生伝』（大日本仏教全書日本往生極楽記外十二部）

『多武峰略記』（大日本仏教全書寺誌叢書二）

『多武峰縁起』（大日本仏教全書寺誌叢書二）

『発心集』（大日本仏教全書）

『私聚百因縁集』（大日本仏教全書）

『撰集抄』（大日本仏教全書）、等参照。

- 3) 当該説話に登場する増賀に辱められた相手は、「遵子」説以外に、「昌子内親王」説や「藤原詮子」説があつて、「増賀が対した后が誰であるかによって、この奇行の意味と印象はかなり違ったものになる」（三木紀人『多武峰ひじり譚』法蔵館、昭和63年、178頁）けれども、本稿では、増賀の相手を特定する作業は本稿の目的に大きな影響を及ぼさないので、当該説話の所伝する「三条関白太政大臣（藤原頼忠）の娘（遵子）」説をそのまま受容しておくことにする。
- 4) 「この世をば わが世と思ふ 望月の かけたることも なきを思えば」（『続古事談・第一』『群書類従・第二十七輯』続群書類従完成会、昭和62年）
- 5) 藤原実資『小右記』（『史料大成』臨川書店）は、天元元年（978）から長元5年（1032）までの記録。
- 6) 増賀の奇行を虚伝とする見方は、かねてより提出されている（平林盛得「増賀聖奇行説話の検討」『国語と国文学』至文堂、昭和38年10月、等参照）。
- 7) 「増賀上人三條宮に参り振舞事」卷一二ノ七、日本古典文学大系27『宇治拾遺物語』岩波書店、1983年、337～9頁。
- 8) 『魔訶止観』下（岩波文庫）、1996年、149頁。  
増賀の奇言奇行を理解する宗教思想的背景として、『魔訶止観』中の本引用文の存在を指摘した先行研究として、伊藤博之「撰集抄における遁世思想」、仏教文学研究会編『仏教文学研究』5、法蔵館、昭和45年5月、185～6頁参照。
- 9) 同上
- 10) 同上